雅楽だより

《目次》

●芸術院賞　恩賜賞　受賞　小野功龍氏　1
●阿弥陀聖衆来迎図　古田　亮　1
●雅楽随想　「秦姓の舞」　小野功龍　2
●龍笛に鉛を入れる理由　笹本武志　3
●雅楽いろいろＱ＆Ａ⑩　芝　祐靖　6
●雅の道は続いてこそ　雅楽道友会を訪ねて　6
●現代語訳『楽家録』(1)　遠藤　徹　9
●宇宙で笙を奏でる若田さんと天理大学雅楽部とのコラボ　佐藤浩司　9
●世界的価値を有する雅楽　篳篥用ヨシを保存し継承するために　10
●情報欄　11

第38号　2014（平成26）年7月
発行　雅楽協議会

芸術院賞　恩賜賞　受賞

天王寺楽所雅亮会楽頭　小野　功龍氏

芸術の進歩に大きな貢献をした人たちに贈られる２０１３年度の日本芸術院賞に雅楽の分野では、天王寺楽所雅亮会楽頭の小野功龍氏が選ばれました。また特に優れた人に贈られる恩賜賞にも選ばれました。

大阪市浪速区のご自宅でお話を伺いました。

日本芸術院賞並びに恩賜賞の受賞おめでとうございます。

「ありがとうございます。びっくりしたのが正直な気持ちです。ただ天王寺の舞楽を一途に伝えてきたことが評価されたのだと思っています。これからは次の世代の方々に継いでいってもらえるように努めていきたいと思っています。」

昨年の5月は瑞宝中綬章を受章され、引き続いてのお祝いですね。

「瑞宝中綬章は学校（相愛大学）でのことですね。芸術院賞は芸の方で、天王寺の舞楽、秦姓の舞楽の伝承が認められたということですので、また嬉しさが違いますね。」

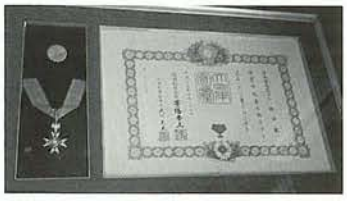
小学校1年生で迦陵頻を舞われているのですね。

「そうです。聖霊会で小学校1年生の時に迦陵頻を舞ったのが始めです。戦前のことですね。相愛大学で教鞭をとっていた時期は、授業を終えてから練習に参加していました。」

幕末から明治にかけて聖霊会が一度途絶えたそうですね。

（2ページへ続く）

受賞の喜びを語る小野功龍氏



昨年受賞された瑞宝中綬章

阿弥陀聖衆来迎図

東京芸術大学准教授　古田　亮

絵画から音楽が聞こえるとすれば、どんな時だろうか。それは目と耳とがイマジネーションでつながれたときかも知れない。音楽を奏でる日本の絵画を、時代を追って紹介していきたい。

臨終の者を西方浄土から迎えに来る阿弥陀を描く来迎図。中でも最も荘厳な大幅がこの作品だ。

全体で横幅４２２センチある。中央に阿弥陀、手前に観音・勢至菩薩。その後方に菩薩たちが楽器を奏でながら舞い降りる。極楽浄土の大舞楽団だ。

菩薩たちが手にしているのは太鼓、鼓、横笛、琵琶、そして笙、篳篥など今日でも雅楽で使われる伝統楽器だが、いったいどんな曲を演奏しているのだろうか。中国から伝わった雅楽（唐楽）か、あるいはそれが国風化した曲であったろうか。

迎講などで実際に演奏される楽曲もあるが、ここに描かれた楽器は具体的な楽曲を想定して選ばれているのではない。むしろ多彩な楽器と、華麗な衣装で舞い唄う菩薩たちを描いて、見る者の頭の中に音楽を響かせようとしているのである。

（4ページへ続く）

「そうです。明治天皇の東京遷都により、宮廷や南都の楽人とともに、四天王寺の楽人達も召されて東京へ移ることになり、また廃仏毀釈運動もあり長年の伝統を誇ってきた天王寺楽所は解体の危機に陥りました。しかしその伝統の消滅を惜しんだ大阪の仏教僧、残留の天王寺楽人や民間の篤志家によって天王寺舞楽の再興が図られました。聖霊会は19年ぶりに明治12（1879）年に再興されました。雅亮会はその5年後明治17（1884）年に創立しました。そして天王寺の舞楽は昭和51（1976）年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。」

雅亮会の創立より今年で130年になるのですね。

ところで昨年12月に出版されました『仏教と雅楽』（発行・法蔵館）の中に四天王寺の舞について要約されている個所がございましたので引用させてください。

これからもお体ご自愛されまして、益々のご活躍をお祈りしております。（鈴木治夫）

雅楽随想「秦姓の舞」

小野功龍

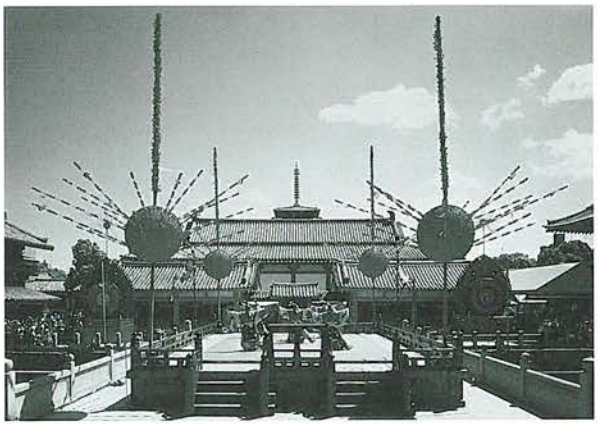
今日宮内庁楽部に伝承される舞と天王寺の舞を比べると、その違いは、まず舞の「型」の違いと「舞振り」の違い、さらに加えて奏舞の「故実」の違いにあるといえよう。先述したように、総じて宮内庁の舞は、まことに折り目正しく、しかも洗練された繊細優雅なその舞型と舞態は、鑑賞する上に至上のものといえる。これに対して天王寺流の舞態と舞型は、一見荒削りで粗放なもののように見えるが、それらによって創り出される舞の線の太さと勇壮さ、スケールの大きさが特徴として挙げられる。天王寺舞楽では壮大な堂塔伽藍に囲まれた、野外庭上に設けられた広大な舞台で行われる。例えば「聖霊会舞楽法要」では伽藍北、六時礼賛堂との間の通称「亀の池」上に架けられた、縦12メートル横9メートル高さ1メートルの広大な石舞台に数々の舞楽が演じられるのであるが、その舞型や舞態はこの舞台に調和し、まことに相応しい効果を醸し出すのである。また、中世以来聖徳太子の寺として庶民の信仰を集めてきた四天王寺に基づく様々な故実が舞に加えられ、それがまた独特の演出として舞楽を構成している。

天王寺流「秦姓の舞」として古くは「太秦」を姓とする歴代の楽家によって営々と伝えられ、また明治の世にそれを受け継いだ雅亮会の先覚者によって伝えられてきた文字通り「浪速の舞楽」を、我々はさらに次の世代へ受け渡していく大きな矜持と責務を感じる昨今でもある。

最後に演奏曲目についてその特色を略述して擱筆したい。

初めに演じられる「甘州」には、当曲のあと「急」の章として早いテンポで「早甘州」が舞われるが、この部分は宮内庁楽部の舞にはない天王寺舞楽独特のものである。また舞人はこの「早甘州」の重吹き（同じ楽曲を重ねて演奏すること）で退出する。

次に右方の「蘇利古」は、通常四人舞であるが、天王寺では五人の舞人によって奏される。また「聖霊会」においては、法会の冒頭に聖徳太子の御影を納めた厨子の扉が僧侶によって開かれる作法とともにこの舞が奏される。したがって四天王寺ではこの舞を「聖徳太子お目覚めの舞」と称している。



5人で舞う　蘇利古　四天王寺聖霊会

「還城楽」には、二拍四拍の複合拍子である只拍子で奏される左方の「還城楽」と、二拍と三拍の複合拍子である夜多羅拍子で奏される右方の「還城楽」の二種あるが、天王寺楽所には右方のもののみが存在する。宮内庁楽部の右方「還城楽」と比較すると、舞の構成は類似しているが舞態には違いがある。また夜多羅拍子は天王寺楽人が考案した拍子型であるといわれている。

「蘭陵王」は、かつて小野樟陰が宮内庁楽師薗広道より伝授を受けたものといわれ、「還城楽」と共に自己の得意とした舞の一つとして伝えられてきたものの一つである。

「陪臚」は、天王寺舞楽では、舞人は鳥兜を着するのが特徴である。しかも左右両部の扱いとなるので、舞人のうち一臈と三臈は右方の鳥兜を着け右方の楽舎より登場し、二臈と四臈の舞人は左方の鳥兜を着け左方の楽舎より登場する。またその登場に際して前後二回にわたって舞台上を巡る所作を行う。これを「大輪小輪」と称する。

（『仏教と雅楽』より「秦姓の舞」抜粋）

鳥兜を着して舞う陪臚

龍笛に鉛を入れる理由

笹本武志

雅楽の稽古を受けているとき、先生から「龍笛（りゅうてき）の頭の部分には鉛が入っています。これは構えたときのバランスを取るためです」と説明されたことはありませんか。多くの邦楽の事典や雅楽の参考書にも、同様の記述が見られます。構えたときのバランスを取るために鉛を入れる、これって本当なのでしょうか。

そもそも、構えたときのバランスってなんなのでしょう。鉛を入れて頭部を重くしないと楽器としてのバランスが取れないというのであれば、篠笛やフルート、ピッコロは、バランスが取れていない楽器ということになってしまいます。でも、篠笛やフルートを吹いている方々は、もちろん自分の楽器が「バランスが取れていない」などと思ったことはないでしょう。

私自身、どこから得た情報か忘れましたが、やはりバランスを取るために鉛が入っている、と聞き、何を持って「バランスが取れる」と言うのだろう、と常々疑問に思っていました。

私は、尺八の家元の家系に生まれ、尺八で芸大を出ましたが、在学中に雅楽の授業を取ったことから、雅楽の道に進みました。その間、能の笛や、正倉院宝物の排簫（はいしょう）や雅楽尺八も習得し、多種多用なエアリード（※）の管楽器を演奏してきました。

※エアリード：マウスピースやリードといった発音体を持たず、周りの空気を振動させて発音する管楽器のこと。オーケストラではフルート、日本の楽器ではよこ笛・尺八類がこれに該当する。

排簫・雅楽尺八・古代横笛・龍笛・能管・現代の尺八を舞台でも吹いてきて、龍笛の際立った特徴として挙げられるのは、その音量です。雅楽はもともと外で演奏されてきた音楽ですので、外の音の遮音も、楽器の音が壁に跳ね返って聞きやすくなる効果も、全くありません。そのため、楽器そのものの音を大きくする必要があったのでしょう。

龍笛の外観的特長として真っ先に挙げられるのは、指孔の大きさです。その孔の大きさゆえ、初心者は塞ぎきれずに音を出しづらい要因になっています。また、歌口もかなり大きいので、息をたくさん使います。その為、習い始めの方には、龍笛はかなりハードルの高い楽器といえますが、指孔と歌口の大きさが、音量に大きく関わっています。

指孔の大きさと音量は比例します。指孔が大きくなれば音量もあがります。また、音量を上げるためには息を力強く吹き込む必要がありますが、その息を受け止めるためには、歌口も大きくしなければなりません。壁のない野外での演奏のために、龍笛の形が必然的に求められたのでしょう。

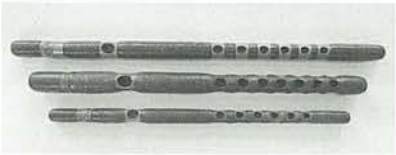
それならば、篠笛の歌口と指孔を大きくすれば、龍笛と同じような音量が出せそうですが、実際にはそうはなりません。篠笛のような軽い楽器に力強く息を吹き込むと、楽器がそっぽを向いてしまいます。具体的に言うと大きな音を出す際には、強い息を受け止める"重さ"が楽器に必要なのです。

これこそが、龍笛の頭に鉛を入れている元来の目的です。樺や籐を巻いて漆で固めるのも、重さを確保するためで、「割れ防止」ではありません。なぜなら、割れるときは樺や漆まで一緒に割れます。樺を巻くことで、割れ防止効果は多少はあるかも知れませんが、それは結果の一端であって、本来の目的ではありません。

芸大で雅楽の講師をしていたときに、専攻学生が鉛の取れた龍笛を持ってきたことがありました。「先生、けっこう柔らかいいい音がするんですよ」というので聞いてみたら、芯の抜けた、柔らかい音でした。こういう音色は遠鳴りはしますが、舞台の上で大音量に聞こえてくる篳篥と対峙するにはどうにも心もとないでしょう。

芯のある太い音を出す、これが龍笛の頭に鉛を入れる目的です。その結果、構えたときにバランスを取りやすいという気がして、いつしか目的と結果を取り違えた説が流布された、と私は思っています。

笹本武志　雅楽演奏家・正倉院古代笛演奏家・作曲家
琴古流尺八を笹本宗秀、二世初見宗郷、山口五郎の各氏に、雅楽を芝祐靖氏に師事。正倉院宝物の排簫・雅楽尺八の復元製作と演奏を独学で習得し、正倉院復元楽器のトッププレーヤーとして知られている。これまで欧米を中心に世界30カ国ほどで演奏。ムサシノ雅楽教室、雅の会ふくしま、北区子ども雅楽教室、ニューヨーク・コロンビア大学雅楽プロジェクト、他多数の雅楽教室の講師を務める。また、日本の歴史上初めてであろう、正倉院（雅楽）尺八教室を主宰している。主な著書に「はじめての雅楽」（東京堂出版）、図説雅楽入門事典（柏書房・共著）がある。



写真上　阿弥陀聖衆来迎図 三幅

（1ページ左より）

極楽は蓮華の花が咲き芳香と音楽に包まれたまさに夢のような世界だと経典にはある。お迎えにはまだ早い諸氏も、一度はこの作品に耳を傾けて、極楽世界へ昇天する刹那を思い描いてみてはいかがだろうか。

（2014年1月23日付　日本経済新聞「日本美術に聴く音楽十選」より転載）

（写真・平安～鎌倉時代、絹本着色、国宝　阿弥陀聖衆来迎図三幅　高野山有志八幡講十八箇院蔵　写真提供・高野山霊宝館　なお高野山真言宗神奈川雅楽部の協力をいただきました）

台の上に置かれた鞨鼓を両手に持った撥で奏している。左手の撥は今にも振り下ろされる直前のようである。（右上）

箜篌と思われる。絃は6本（右中）

編集部注・阿弥陀聖衆来迎図の全体図では、楽器が見えにくいので楽器部分の拡大図を掲載します。なお、雅亮会楽頭で僧侶でもある小野功龍氏は「平安時代の人々は、自己の観想した浄土世界の荘厳を表出するに最もふさわしい芸術として雅楽を選び、現世において聞く雅楽の音の響きを、まさに浄土の世界にも通じる響きとして捉えていたのでしょう。雅楽の奏楽は、その呼び声を受け止めた歓喜の報恩の響きとしての浄土への奉送だったのではないでしょうか」と語る。

4絃の琵琶を撥で弾く、現在の琵琶より小振りの様に見える。箏は絃が何本なのかはっきりしない。（右下）

排簫　竹を縦に並べて吹く（中右、大太鼓の左上）

鼓を首から下げている。（中右、大太鼓の左上）

右から笛、笙、篳篥の奏者が並んでいる（中左上　阿弥陀の左後）

火焔太鼓　右手に持った大太鼓の撥を振り下ろそうとしている。（中右上）

笙（中左上）

横笛（中左上）

鉦鼓　大太鼓の左（中右上）

篳篥（中左上）

腰鼓　鞨鼓と異なり手で打っている。（左中）

拍板（左　方響の上）

方響　（左・腰鼓の左隣）

雅楽いろいろQ&A⑩
連管筒の置き方と持ち方

芝　祐靖

Q－10

連管筒（龍笛・高麗笛）の置き方と持ち方について、演奏会などで楽器台に置く連管筒の置き方に決まりはあるのでしょうか。例えば龍笛が手前になるように置くとか。また、連管筒を持って歩くときの持ち方は、どのようにするのが良いでしょうか。

A－10

笛筒の持ち歩き方、楽器台への置き方について、古楽書をさぐってみましたが、記述を見つけることはできませんでした。そこで自己流（もしかしたら楽部流）を記しましょう。

「連管筒」は舞楽演奏の管方演奏において使用するもので管絃には用いません。まず、楽屋において、連管筒の蓋をあけて、龍笛を外側、高麗笛を手前にして、紐通し金具を合わせるように、紐で括り付けます。その時、蓋の上部を外側に、穴部を手前にします。

楽屋から管方席へ持ち運ぶ時は、右手人差指と親指で笛が抜け落ちないようにして、小指、薬指、中指で持ち、左手で管筒の尻を持ちます。管方席に着いたら、揖をして、胡床（床几）に腰掛けてから楽器台に笛を置きます。

演奏に際しては、左手で笛筒を軽く押さえ、右手で筒から笛を抜き、頭部を左手に持ち支え、右手は指孔部にして膝上に置き、吹奏時に左手を指穴部にしてから顎に当てます。

（能管などの場合、左手は笛頭部、右手指穴部を支えて顎に当ててから、左手を指穴に移動させるようです。雅楽はこの作法は用いておりません）

演奏が終わり、笛を筒に納めるときは、構えるときの逆と考えて下さい。

☆実際にQさんの目の前で示せば2～3分で済みますが、文章ですと至って複雑ですね。

雅の道は続いてこそ
演奏し　楽器も作り、そして教え伝える
雅楽道友会を訪ねて

雅楽の団体といいますと　演奏を主目的にした団体、また雅楽の教室を開いて発表会や演奏会をする団体などに大きく分かれると思いますが、演奏をし、雅楽を教え、かつ雅楽の楽器も作るというとてもユニークな雅楽団体が東京にあります。創立は1967（昭和42）年というから今から47年も前です。その雅楽道友会を大井町の仕事場に訪ねて、創立の趣旨や活動の内容などを代表の新屋治さんにお聞きしました。

雅楽道友会の創立

○雅楽道友会は演奏することも、教えることも行っていて、なおかつ楽器も作るという団体ですね。それに雅楽だけで生きていけるというのはとても珍しい。それもそろそろ50年近い歴史となる団体は他にはないので是非取材させていただきたいと思っておりました。

まず雅楽道友会の成立の過程を教えていただけませんか。

「雅楽道友会を語るには創設者の薗廣教先生と東儀俊美先生のことをお話しなければなりません。両先生は共に代々続いた四天王寺楽家の末裔で、楽部では廣教先生の4学年下に俊美先生が在席されていました。廣教先生のお父様には姉妹が数人いて多家や東儀家にも嫁がれている（俊美先生の祖母）という姻戚関係でもありました。戦後、宮内省が宮内庁に縮小されるのに伴って楽部の人員も御神楽に必要な人員に留めるということで現在の定員に減らすこととなりました。その結果、廣教先生の薗家は長男であった廣育先生（楽長にて退官）だけを残して次男であった廣教先生以下の弟たちは楽部を去ることになりました。

宮内庁を退官した廣教先生は暫くして民間での雅楽の荒廃を憂い、自分が身に着けている雅楽の技術や技能や心を伝えようと雅楽を教え始めました。そして片手間では教えられ

篳篥のリードを作製する代表の新屋治さん

ないということで近くにアパートを借りて住まわせ、雅楽を教えるという内弟子制度を作りました。

住み込みの内弟子は、6人ぐらいから始まったと思います。当初、生活費はアルバイトをして稼いでいましたが、そのうちに楽器を作り生計を立てていくようになりました。このようになったのは昭和50（1975）年ぐらいからではないかと思います。

午前中はお稽古で午後は楽器作りでした。その頃は笛の注文が　年間200本余、篳篥が100本余ありまして、注文の予約がたまり、作っても作っても予約が減らない状況でした。」

4年間の内弟子

○先ほどの内弟子制度の事ですが、もう少し詳しくお話し下さい。

「内弟子制度は、薗廣教先生が後進の指導者となり得る人材を育成する方法として制度化されたもので、4年間で雅楽の全て管・絃・打物・舞・歌物・御神楽・合奏などを指導できるレベルまでの技量を習得できるようにカリキュラムが立てられています。

例えば管ですと、1年目から早楽、2年目から調子や乱声・延楽・高麗楽、3年目から大曲・序吹、4年目から付物、そして歌（催馬楽・朗詠・久米舞・東遊・御神楽など）を習得します。4年間の目安で全過程を指導できるように習得します。」

「4年間の住み込みで雅楽の基礎をばっちりと仕込まれます。とくに唱歌は厳しかったです。」

笛の製作をする加藤道信さん（奥）と藤脇亮さん（手前）

「4年間の内弟子を終えて地方の実家などに帰り、雅楽を教える人も多くなりました。戦後、雅楽を各地に広げる基礎を作ったのは廣教先生とその弟子たちの力も大きいと思います。」

○40年余り前は、雅楽は今に比べると物珍しいものでしたね。

「そうですね。そしてだんだんと雅楽も広がっていきまして楽器も製作が追い付かないほど注文が増えました。以前の楽務所は目黒でしたが2001年に大井町近辺、現在のところに引っ越してきました。」

○演奏技量を習得すると同時に楽器作りの技術も学ぶのは大変ではないですか。

「そうですね。演奏とは別に楽器作りの技術も身に付けなくてはなりませんので大変といえば大変ですね。修行期間ということで給与も高いとは言えません。」

雅楽を教える教室の開催

○道友会は一般の方へ広く雅楽を教える教室も開かれていますね。

「現在は笙、篳篥、笛、左舞、右舞、そして合奏の指導を行っています。」

○雅楽教室の講師は、道友会の楽師のみなさんですか。

「はい、一般会員の方への教える時の講師は道友会の楽師があたります。道友会の楽師は、廣教先生が存命当時は　篳篥や歌は廣教先生、笙と右舞は薗廣育先生、そして笛は上明彦先生、左舞は池邊五郎先生に指導いただいていました。平成に入り東儀俊美先生から左舞と歌の指導を受けておりました。そして東儀俊美先生には道友会の顧問となっていただいておりました。薗廣育、廣教両先生も東儀俊美先生も故人となられてしまいましたので、現在は池邊五郎先生、池邊光彦先生にお越しいただいております。」

笙の調律をする今西靖志さん

合奏の練習風景　鞨鼓を奏する福岡三朗さん

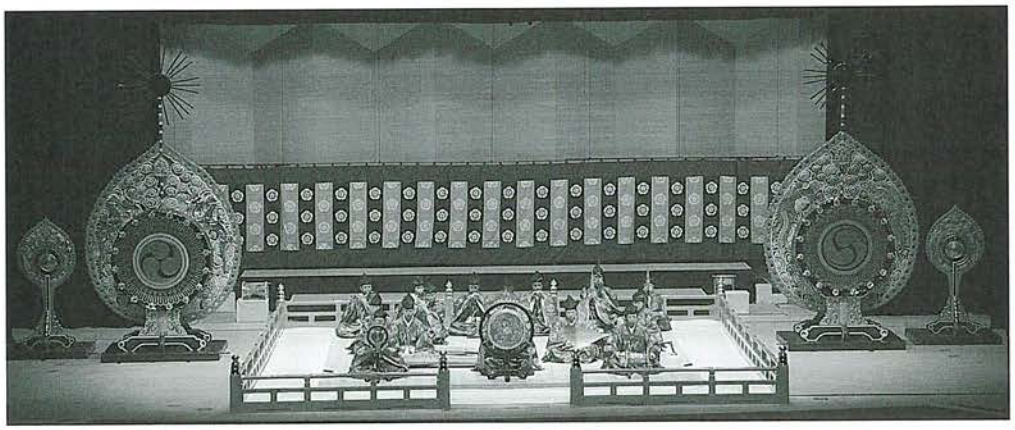
篳篥の演奏を指導する新屋治さん

研修発表会と演奏会

○今年は第10回の「たけの音」という研修発表会を開催しましたね。定期的に開催するのは準備などが大変と思いますが、どんな思いで開催しているのですか。

「たけの音は、研修発表会として位置付けていまして、既に10回目になります。今年の「たけの音」は初めて二部制にしまして、第一部（昼）で研修発表会、第二部（夜）は演奏会として開催しました。

この発表会とは別に今まで2度自主演奏会を開催しています。第1回は平成20年「薗廣教十年記念」、第2回は平成22年「東儀俊美半寿の楽舞」です。今後は今年の様に昼の第一部は研修発表を、夜の第二部は演奏会の形で行おうと考えています。」



第1回演奏会　左右に大太鼓を据えて

第2回演奏会にて　採桑老を舞う東儀俊美道友会顧問

小学校・中学校で雅楽クラブの指導

○小中学校でも雅楽を教えているそうですね。

「はい、近隣の小中一貫校で小学5年生から中学3年生を対象にした雅楽部がありまして、そこで子供たちに笛と篳篥を下新明天祖（しもしんめいてんそ）神社宮司福岡三朗が主導で教えています。

それとは別に、仙台から毎年中学3年生の生徒さんが、修学旅行の班行動として5、6人で見学に来られます。これは社会を知る一環として、また将来仕事を決める時の参考にと東京の職人さん、例えば風鈴を作る職人さんなどのところを訪ねていろいろな話を聞き学ぶという趣旨のようです。今年も5月8日に5名の中学3年生が訪ねてきました。もう今年で7年余り続いています。

生徒さんには、まず楽器作りの仕事場を見学してもらってから、笙、篳篥、笛を体験してもらっています。」

楽器の体験を楽しむ修学旅行の中学三年生

会訓

○最後に雅楽道友会の二つの会訓についてお聞かせください。

「一つは廣教先生が常日頃語っていた「雅の道は続いてこそ」という言葉と、二つ目は東儀俊美先生の「和を以って楽を為す」を会訓としています。

一つは、もの凄い量の雅楽技術や知識、精神を如何に次の世代に伝えるか。二つ目は、演奏者全員が互いに楽論を講じながら仲良くやっていけるかということです。どちらも難しい御題ですが「雅の道は続いてこそ」の実践として研修発表「たけの音」を、「和を以って楽を為す」の実践として親睦旅行を行っています。師匠方が残されたハードルは高くいくらやっても目標に近づいている感覚は得られませんね。」

お忙しいところありがとうございました。と、取材は終わりましたが、取材が終わってからも楽器作りの苦労話や作り方について、また楽器の材料を今後どのようにしていったらよいのかなど情報交換も含めながら話が尽きませんでした。今回の取材でもいろいろな事を学ばせていただきました。

（鈴木治夫）

雅楽道友会製作の龍笛

なお雅楽道友会は管楽器の製作販売も行っております。お問合せは、左記へ

〒142―0043
東京都品川区二葉1丁目15―2
電話・Fax 03―3783―2371
Mail info@gagaku.com
Web www.gagaku.com
工房 Web gagaku.chicappa.jp/koubou/

現代語訳『楽家録』

連載開始にあたって

江戸時代に安倍季尚氏によって書かれた、『楽家録』という本、漢字ばかりで書かれているので、読もうとするとつい気後れしてしまいます。しかし辞書を片手に読んでみると「今と同じことが書かれている」と驚いたり「演奏上の大事なこと」「とてもおもしろいこと」「たのしいこと」などなどが書かれているのに気付きました。そして『楽家録』の現代語訳があると良いのにと思っておりました。

そこで編集部で現代語への下書きをしたものを『體源鈔』の解説を書いていただいています東京学芸大学の遠藤徹准教授に監修していただきながら『楽家録』の現代語訳の連載を始めることにしました。

ただし『楽家録』を順に掲載していきますと時間ばかりかかりますので、関心の強いと思われる個所、管楽器の練習方法を解説している「三管総論」の個所から始めます。これからの連載をお楽しみに。

なお『楽家録』をお持ちでない方は、インターネットで近代デジタルライブラリー楽家録と検索しますと『日本古典全集　楽家録』を全巻(一巻～五〇巻)読むことが出来ます。http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1125445

現代語訳と併せて読むと理解が深まるかと思います。現代語訳に記しているページ数は『日本古典全集　楽家録』のページ数です。

編集部

現代語訳『楽家録』(1)

監修　東京学芸大学准教授　遠藤　徹

十三　三管総論　（457ページ）

鳳笙、竜笛、篳篥の三管は、楽器・声[音]は異なっているが修練の方法は大抵同じなので、「三管総論」として一巻とする。

第一　帝舜楽法

[略]

第二　修練の要[要点]と年令に従い[成し遂げる]功を成す説

（458ページ）

楽の修練は、練習し覚えなければいけないことが多いが、これをまとめるとその要、最も大切な部分、肝要な箇所は唱歌にある。そして息籠[息使い]はその次、指使いはまたその次である。この三つがきちんと身につけば、拍子、清声、声文は、自然に良くなるだろう。これをそれぞれに論じると唱歌が基本で拍子は末である。息籠め[息使い]は基本で清声[音色]は末である。指が基本で声の文[拍子、リズム]は末である。学ぶことは基本を先に、すると末は自然と身につけることができる。そして、成功の次第を論ずると二十歳までに修業をだいたい終えるべきである。そうしないと上手にならない。三十歳になれば、業は益々優れてきて、名声がでて来て名実ともに充実してくる。四十歳になると楽位が備わる。修練を積むことによって楽位をおのずから得るものである。ただにわかに楽位を備えようとしても、得ることができないで終わる。五十歳に至ると血気は徐々に衰え、息が苦しくなり、若い人の者のようには出来なくなる。けれども楽位はますます備わり、そして徳音[品性]を得る。（修業者は道半ばで満足してしまう人や、この段階を超して次の段階へ進む者もいる。故に戒めとしてこのように記した。）

第三　唱歌と奏管の巧拙（上手と下手）の論

（458ページ）

楽は唱歌をするのが難しいのではなく、上手に唱歌をするのが難しい。管を奏するのが難しいのではなく、上手に演奏するのが難しいのである。管の聲[音]が他管と協和するのも又同じで、上手く和するのが難しいのである。いわゆる唱歌は、その聲を軽く浮かさないようにする。そして心を管に寄せて歌わなくてはいけない。口では唱歌をし、心は管聲にあれば、唱歌は良く「文」を成す。そしてこれをもって管を奏すると、管の声はまた良く調べに和する。これが良い唱歌である。もし、もっぱら心を唱歌のみに置くと、管の聲は文にならない。そして、「管」のための「管」、「唱歌」のための「唱歌」であり、管を奏するときの益とはならない。これがどうして良い唱歌というであろうか。管を奏するには、ひとたび業「技」を受け、譜面を授けられれば、誰が演奏しないだろうか[誰もが演奏する]。しかし、良く演奏できるものは少ない。唱歌においては、良く文をなすけれども、管を吹くと、その多くは失われてしまう。節文は聞くに足るものが無く、これが良き演奏といえるであろうか。いわゆる、良く奏するというのは、管聲[楽器の声]の文と唱歌と違うところは無い。唱歌が[管聲に]及ばなければ、さらに唱歌をする、このようにした後にはじめて良く演奏したといえるのである。管聲が他の管に協和するのは、最も難しい。良く和するということは、水が水に合うようなものである。これは他の管と一つのように少しの間隔も無くということだ。このようでなければ、良く和したということはできない。これらは、工夫しひたすら練習に没頭したとしても、その精緻に至るのは易しくない。ましてや初学（初心者）の人はなおさらである。「自分はそれを極めている」という者は、いまだその極みを知らない者である。

第二修樂之要幷隨年齒成功說
夫修練樂者、雖其術多、而約之則其拍子清聲、聲文者可自得之矣。分之終末也。學者先本、則末自至矣。而凡論成其功三十歲而業益精、名聲可樂位自得焉。徒驟欲樂位備、則終不可

『日本古典全集　楽家録』
（458ページの一部）

宇宙で笙を奏でる若田さんと天理大学雅楽部とのコラボ

天理大学雅楽部顧問　佐藤浩司

去る5月3日の午前1時30分から2時30分の間、宇宙飛行士の若田光一さんと雅楽部のコラボがNASAを経由して実現した。若田さんは笙を演奏、NASAにスタンバイしたケンジ・ウィリアムスさんがヴァイオリンで

応じ、続けて雅楽部が『越天楽』を演奏した。まさにISS（国際宇宙ステーション）とNASA（ジョンソン宇宙センター）と天理が一つになり、響き輝いた時を共有したのである。

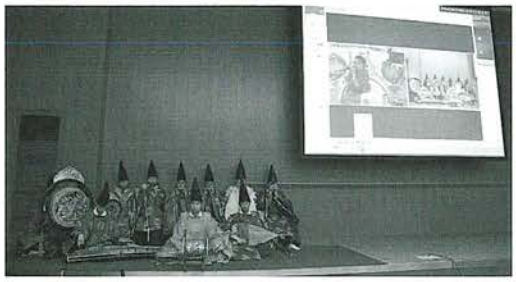
宇宙ステーションで笙を演奏する若田光一さん

事の発端は、ケンジさんが古代から日本に伝わる楽器である笙に注目し、これを宇宙から若田さんに演奏して貰いたいと思ったことにある。ケンジさんは、ベラ・ガイアの活動を通じて若田さんと交流があった。ベラ・ガイアとはケンジさんの映像作品で、NASAの宇宙衛星が観測したGデーターをハイエンド3D映像により可視化したものに、世界の文化遺産などの映像を重ね、ライブ演奏をも取り込んだものである。昨年の2月にニューヨークで開催したグランドセントラル駅と東京駅との姉妹駅締結において、『ニューヨーク天理雅楽会』とケンジさんとが共演したのがきっかけで、ケンジさんと天理教のニューヨーク文化協会の責任者である福井陽一さんとの交流ができ、福井さんを通じて、天理大学の佐藤に笙の提供の申し出があったのである。

佐藤は昨年の7月12日、調律した笙と笙の手移りや拙著『雅楽　源氏物語のうたまい』などを入れた2個口の品物を、郵便局に託した。ところが8月24日になって、どういうわけか笙だけが帰ってきたのである。郵便局に尋ねると、7月25日にはヒューストンのスペースセンターの若田さんのところに届いているのが確認できたが、笙の方は受取人不在で戻ってきてしまったのである。戻ってきた笙をみると「七」のリードが外れていた。何処ではずれたかは定かではないが、笙みずからが修理を望んで帰ってきたものと思われる。今度は念入りに蜜蝋をつけ、若田さんの元へ直ちに送った。なお、笙の演奏経験が無い若田さんのために、カザフスタンのバイコヌール宇宙基地とニューヨークを結び、福井さんの手ほどきでレッスンが始まった。

元々この音楽イベントは、NASA主催の文化教育プログラムである「ミュージック・イン・スペース」の一環として行われたものである。女性宇宙飛行士でフルート奏者のケイディさん、ヒューストン交響楽団の首席ヴァイオリン奏者であるセルゲイさん、フルート奏者でテキサス州バサデナ市パールホール小学校の指導者でもあるジェイミーさん、そして小学校の合唱団が参加して行われ、雅楽部は天理から応じたのである。

若田さんは笙について、「鳳凰」が羽をたたんで休んでいる姿を象って作られたとか、日本には早い時期に中国大陸から伝わり、正倉院にも所蔵されているとか、竹管に開けられた指孔を押さえることによってリードが振動して音が鳴る、いわばハーモニカと同じ原理であるとか説明し、おもむろに笙を吹き始めたのである。無重力であると笙を手離してもそのままの状態であるのが当然といえば当然なのだが、不思議な感じがした。若田さんは笙の演奏を「宇宙遊泳のようだ」と表現していた。この後、若田さんとスタジオの小学生及び天理大学生との間で質疑応答があり、小学生が「地球で演奏するのとどのような違いがあるのか」との質問に対し、「空気や気圧は地球と同じに調整されているので変わらない」と答えていた。


宇宙ステーションの若田さんと合奏する天理大学 雅楽部

将来、「観月」演奏ならぬ「観地（地球を観る）」演奏をしてみたいものだ。

世界的価値を有する雅楽

篳篥用ヨシを保存し継承するために

雅楽は1300年以上の歴史を持っています。そして1955（昭和30）年、宮内庁楽部の楽師が演奏する雅楽は、国の重要無形文化財に指定され、楽部楽師は重要無形文化財保持者に認定され、千数百年の伝統ある雅楽を正しい形で保存するよう日々研鑽されています。さらに宮内庁楽部の演奏する雅楽は、2009（平成21）年、ユネスコ無形文化遺産保護条約「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載決議がなされ、これにより今後伝承されていくべきわが国の伝統文化として、我が国のみならず国際的にも認知され、歴史的、芸術的にも世界的価値を有することとなりました。

また共に平安時代から続く大阪四天王寺の「聖霊会の舞楽」（演奏は四天王寺雅亮会）と奈良の「春日若宮おん祭の神事芸能」（舞楽演奏は南都楽所）は、国の重要無形民俗文化財に指定されています。（「聖霊会の舞楽」は1976（昭和51）年、「春日若宮おん祭の神事芸能」は1979（昭和54）年）

このように雅楽は、世界に誇る日本の大切な文化であり、後世に伝えなければならない芸術であります。

リードの材質が悪くなってきている

しかし、雅楽の音色を決める篳篥のリードの材料であるヨシの材質が悪くなってきていると以前から話が出ていました。

東儀兼彦元宮内庁楽部首席楽長は2006年の春「品質の悪くなった蘆を見ては、淀川も河川工事（1970年代）で蘆が駄目になったのかと嘆いておりました。また琵琶湖の蘆・茨城県瓜連の蘆・また利根川の蘆と試しましたが、やはり淀川の蘆に叶う品質ではありませんでした。」と記し、「雅楽の音色を伝えていくために、なんとしても鵜殿のヨシを守らないといけない」と鵜殿ヨシ原へ通い、篳篥用ヨシの保全のために動かれました。

また、東儀俊美元宮内庁楽部首席楽長も、2009年10月「1970年頃から河自体の環境の悪化でしょうか、リードにできる蘆が次第に減ってきました。この傾向は年を経るごとに悪くなりました。事態を憂慮した我々は鵜殿以外の方々の蘆を使ってみましたが、質が落ちたとはいえ鵜殿の蘆に匹敵する蘆はありませんでした。この鵜殿が高速道路の通り道になるという話を聞き驚きました。そうなると蘆原全体の環境が変化し、葦原は絶滅の危機に瀕すると想像されます。」と話され、2009年7月に篳篥のヨシを守るための署名を呼びかけました。1か月だけで2万3千名の署名が集まり、国土交通省へ署名を提出しました。

一昨年　着工　決定

ところが、2012年4月6日、ヨシ原を横断する新名神高速道路（京都府八幡市～大阪府高槻市）の建設着工の閣議決定がなされました。

雅楽の関係者は、ただちに「篳篥用ヨシを守る」ための声明を出し、署名活動（「SAVE THE 鵜殿ヨシ原～雅楽を未来につなぐ～」代表・中川英男）も始められました。翌2013年5月には国際ダブルリード協会より「高速道路で雅楽に必要不可欠の産地を破壊するのは聖像を破壊するに等しい悲劇である」（「雅楽だより」34号2013年7月号参照）との檄文が寄せられたほか、世界各地より激励の言葉が寄せられました。2014年11月8日、集まった署名7万8千889筆は太田昭宏国土交通大臣に提出されました。

篳篥用ヨシが年々減少　第4回検討会で報告された

新名神高速道路建設を請け負っている西日本高速道路(株)(通称NEXCO西日本)は、2013年1月10日、高槻市市民会館で「新名神高速道路　鵜殿ヨシ原の環境保全に関する検討会」第1回を開催し、今年（2014年）5月25日、新大阪で第4回の検討会を開催しました。

第4回検討会で記憶に残るのは、「上牧(ヨシ原の上流側)で篳篥用のヨシは、年々採れる本数が減ってきている」「道鵜町（ヨシ原の下流側）でも以前は篳篥用のヨシが採れて宮内庁に100本ほど収めていましたが、今は採れなくなりました」などヨシ原で入会権をお持ちで実際にヨシを刈り取られている方々からの発言でした。

まだヨシ原の中は高速道路の工事は始まっていないのだが、篳篥用のヨシは年々減少しているというのである。

平安時代からの雅楽の伝統の音色を守り、後世にも同じ音色を伝えていくため、鵜殿ヨシ原の篳篥用ヨシの保全と増加のため、みんなで知恵と心を寄せ合っていきたいと願う。

前号に掲載できなかった演奏会など

○南都楽所など　ベトナム公演
4月13日、14日、15日
ベトナム・フエ宮廷伝統芸術劇場ほか
出演　南都楽所　中村仁美　石川高
公演名　横浜能楽堂INフエフェスティバル
主催　フエフェスティバル実行委員会ほか

○雅楽　雅鳳会演奏会（東京）
6月14日（土）午後2時
小岩アーバンプラザ
管絃　盤渉調　青海波　ほか
舞楽　納曾利　還城楽
還城楽　長慶子
第2部　舞楽　振鉾一節　二節
五常楽破・急　仁和楽
問合せ　TEL06―6214―8260

星祭り　師岡熊野神社（神奈川）
7月6日（日）午後7時
管絃　盤渉調音取　越天楽　国風歌舞　東遊
舞楽　還城楽　演奏　横浜雅楽会
問合せ　TEL045―531―0150

近江神宮燃水祭（滋賀）
7月7日（月）午前11時
舞楽　桃李花紫上　出演　女人舞楽原笙会
問合せ　TEL0797―23―1886

東京楽所　第5回定期公演（東京）　七夕の雅楽
7月12日（土）午後5時
S席5000円　A席4000円
東京オペラシティコンサートホール
管絃　壱越調調子　胡飲酒序　同破　ほか
舞楽　蘭陵王　納曾利
問合せ　TEL03―3560―3010

夏祭　西宮神社（兵庫）
7月20日（日）午後7時半　8時半（2回）
舞楽　賀殿急　納曽利　女人舞楽原笙会
問合せ　TEL0797―23―1886

雅楽と国際文化交流（東京）
7月21日（月・祝）午後3時　5000円
紀尾井ホール（小ホール）
第一部・講演「ことばは音楽とどう関わるか」
第二部　雅楽演奏　管絃と舞楽
演奏　十二音会
主催　公益社団法人北之台雅楽アンサンブル
問合せ　TEL0470―62―6355

文月会第18回温習会（東京）
7月21日（月・祝）赤坂区民センター
管絃と舞楽

雅楽以前　～国立劇場の復曲をふりかえる～（東京）
チケットプレゼント有り
7月26日（土）午後2時
一般4100円　学生2900円
国立劇場小劇場
越天楽の音楽
黄鐘調音取　安城楽［越天楽破］越天楽
伎楽組曲
行道乱声　呉公急　呉女急
太孤急　迦楼羅
敦煌琵琶譜の音楽
急胡相問　風香調　調子　傾盃楽
西江月　心事子　伊州　急曲子
出演　伶楽舎
問合せ　TEL03―3265―7411

第60回　篝の舞楽　四天王寺（大阪）
8月4日（月）午後7時　1000円
四天王寺伽藍内　講堂前前庭
舞楽　振鉾　北庭楽　納曽利　賀殿　長慶子
演奏　天王寺楽所雅亮会
問合せ　TEL06―6771―0066

雅楽の夕べ　大崎八幡宮（仙台）
8月12日（火）午後6時半
演目　未定　演奏　伶楽舎
問合せ　TEL022―234―3606

雅楽月見の宴（千葉）
8月12日（火）午後7時　一宮海岸
管絃　平調・盤渉調より　演奏　玉前雅楽会
問合せ　TEL0475―42―2711

中元万燈籠　春日大社　直会殿（奈良）
8月14日（木）午後6時30分ごろ
舞楽　林歌　演奏　南都楽所
問合せ　TEL0742―22―7788

春日山盆灯会（福岡）
8月15日（金）午後8時
正行寺春日山雅楽御堂（福岡県春日市）
舞楽　曲目未定　演奏　筑紫楽所
問合せ　℡092―596―8585

一宮川燈篭流し（千葉）
8月16日（土）午後7時半
一宮川河口特設舞台
舞楽　未定　演奏　玉前雅楽会
問合せ　℡0475―42―2711

「コーヒーと雅楽」
金沢大学公開講座（富山）
8月23日（土）午後1時半　1000円
ウイング・ウイング高岡ホール
洋遊会会長　上野慶夫　ほか
問合せ　℡0766―64―2038

三渓園　観月会（神奈川）
9月7日（日）午後6時　三渓園臨春閣
国風歌舞　東遊　舞楽　陵王　還城楽
演奏　横浜雅楽会
問合せ　℡045―531―0150

伊勢神宮　観月会（三重）
9月8日（月）午後6時頃より
外宮　勾玉池　舞楽　曲目未定
問合せ　℡0596―24―1111

名月管絃祭　下鴨神社（京都）
9月8日（月）午後6時
舞楽　曲目未定　演奏　平安雅楽会
問合せ℡075―781―0010（下鴨神社）

仲秋管絃祭　日枝神社（東京）
9月8日（月）午後6時　3000円
演目　未定
問合せ　℡03―3581―2471

放生会舞楽　石清水八幡宮（京都）
9月15日（月）午前8時　舞楽　胡蝶
午前10時　舞楽奉納　蘭陵王　納曾利
演奏　平安雅楽会
問合せ　℡075―981―3001

布橋灌頂会（富山）
9月21日（日）午前10時
立山博物館　演奏　洋遊会
問合せ　℡076―445―3320

第8回斑鳩雅楽フェスティバル（奈良）
9月21日（日）午後2時　いかるがホール
前売り800円　当日千円　管絃　越殿楽他
舞楽　胡蝶　青海波　抜頭
お話「打物」について　佐藤浩司
問合せ　℡0745―75―7743

秋季神楽祭　伊勢神宮　内宮神苑（三重）
9月22日、23日、24日　各午前11時
舞楽　振鉾　迦陵頻　抜頭（右）
問合せ　℡0596―24―1111

春日山秋季彼岸会（福岡）
9月23日（火・祭日）10時
正行寺春日山雅楽御堂（福岡県春日市）
舞楽　曲目未定　演奏　筑紫楽所
問合せ　℡092―596―8585

はじめての雅楽
9月23日（火・祭日）午後2時
無料（抽選）　北九州市立響ホール
レクチャー　講師　野原耕二
主催　北九州国際音楽祭
問合せ　℡093―663―6567

管絃の夕べ
9月28日（日）午後6時半　こしがや能楽堂
一般2000円　学生1000円
曲目　越天楽残楽三返　朗詠　嘉辰　ほか
出演　東京楽所
主催　公益財団法人越谷施設管理公社
問合せ　℡048―985―1112

今宮神社　秋の大祭（京都）
10月8日（水）午後7時　宵宮祭　御神楽
9日（木）午前10時　東遊
演奏　平安雅楽会
問合せ　℡075―491―0082

下鴨神社　大国祭（京都）
10月9日（木）午後1時
舞楽　未定　演奏　平安雅楽会
問合せ℡075―781―0010（下鴨神社）

★★読者チケットプレゼント★★
☆国立劇場（東京）7月26日（土）
2名様ご招待　7月12日必着　招待券送付
応募資格・「雅楽だより」定期購読者
応募方法・はがきに希望の演奏会、住所、氏名、電話番号など必要事項を記入。
応募先・〒188―0013
東京都西東京市向台町6―12―6鈴木方
「雅楽だより」編集部

新刊など

○「重要無形民俗文化財　四天王寺聖霊会の舞楽」
A5版16ページ。発行・大阪府教育委員会ほか。
写真を豊富に掲載しながら、四天王寺聖霊会を解説。曲目解説もあり聖霊会の全体像が一目で分かるようになっている。

○「雅楽はすごい」雅楽解説　其の弐
野原耕二著　A5版16ページ　500円
雅楽の魅力を、様々な角度から紹介するシリーズ、其の弐では「雅楽　左方と右方」の概念を中心に紹介。

○82円切手に陵王
5月に発売された山形県の記念切手に林家舞楽。

芝祐靖先生へ質問を

芝先生へ笛に関する質問をメールかFaxでお寄せください。お待ちしています。

寄付のお願い

ご協力いただける方、寄付をお願い致します。お振込は、購読料の口座へ、通信欄に「寄付」とご記入ください。

「雅楽だより」
購読・継続　申し込み方法
購読料一年（4回発行）千五百円。（送料込）
郵便振込用紙に住所、氏名をご記入のうえ、
［口座番号］00140―5―614032
［加入者名］雅楽協議会
までお振込みください。ご記入頂いた住所に「雅楽だより」を送らせて頂きます。

「雅楽だより」第38号
2014（平成26）年7月1日
発行　雅楽協議会
編集　雅楽協議会「雅楽だより」編集担当
連絡先　〒188―0013
東京都西東京市向台町6―12―6（鈴木治夫）
TEL・042―451―8898
FAX・042―451―8897
メール　gagakudayori@yahoo.co.jp
http://www.gagaku-kyougikai.com/
印刷　秀英堂紙工印刷株式会社

雅楽の楽器・譜面　ほか
㈱　武蔵野楽器
〒114―0003　東京都北区豊島1―5―6
電話　03―5902―7281
Fax　03―5902―7282